

060 やもめの息子を生き返らせる(ルカによる福音書 7:11~17)

一人息子をよみがえらせることによって、泣き悲しんでいるやもめにあわれみを示す(回復記)

11 それから間もなく、イエスは (カファルナウムから) **ナイン** という町に行かれた。弟子たちや大勢の群衆も一緒であった。→口語訳：カペナウム

12 イエスが町の門に近づかれると、ちょうど、ある母親の一人息子が死んで、(葬送のため) 棺が担ぎ出される所だった。その母親はやもめであって、町の人が大勢そばに付き添っていた (→当時のユダヤの習慣では、葬送の行列があると、それに気づいた人たちは、仕事を止めて参加することになっていた)。

→As he approached the town gate, a dead person was being carried out—the only son of his mother, and she was a widow. And a large crowd from the town was with her(NIV).

→And when He came near the gate of the city, behold, a dead man was being carried out, the only son of his mother; and she was a widow. And a large crowd from the city was with her. (NKJV)

→やもめ：配偶者を失って独身でいる者で、元来、やもめの語は日本書紀などには「寡」、「寡婦」の字があてられ、夫をなくした女、夫のない独身の女を意味した。妻をなくした男は「やもお」と呼ばれ、「鰥」「鰥夫」の字があてられた。「やもめ」は「屋守(やもり)」が語源という一説があり、一人で家を守るという意味です。「屋守」に「女」をつけて「やもめ(屋守女)」、「男」をつけて「やもお(屋守男)」になったと言われている。しかし「やもお」は、次第に「やもめ」に男性も含まれる(→寡夫)ようになった。→やもめの保護は、聖書の主要なテーマでもある(「やもめ」は、旧約聖書には40回、39聖句に、新約聖書には29回、28聖句に登場する)。

→テモテへの手紙一5:3~16

身寄りのないやもめを大事にしてあげなさい。やもめに子や孫がいるならば、これらの者に、まず自分の家族を大切に、親に恩返しをすることを学ばせるべきです。それは神に喜ばれることだからです。身寄りがなく独り暮らしのやもめは、神に希望を置き、昼も夜も願いと祈りを続けますが、放縦(→ほうじゅう:気ままな)な生活をしているやもめは、生きていても死んでいるのと同然です。やもめたちが非難されたりしないように、次のことも命じなさい。自分の親族、特に家族の世話をしない者がいれば、その者は信仰を捨てたことになり、信者でない人にも劣っています。やもめとして登録するのは、六十歳未満の者ではなく、一人の夫の妻であった人、善い行いで評判の良い人でなければなりません。子供を育て上げたとか、旅人を親切にもてなしたとか、聖なる者たちの足を洗ったとか、苦しんでいる人々を助けたとか、あらゆる善い業に励んだ者でなければなりません。年若いやもめは登録してはなりません。というのは、彼女たちは、情欲にかられてキリストから離れると、結婚したがるようになり、前にした約束を破ったという非難を受けることになるからです。その上、彼女たちは家から家へと回り歩くうちに怠け癖がつき、更に、ただ怠けるだけでなく、おしゃべりで詮索好きになり、話してはならないことまで話します。だから、わたしが望むのは、若いやもめは再婚し、子供を産み、家事を取りしきり、反対者に悪口の機会を一切与えないことです。既に道を踏み外し、サタンについて行ったやもめもいるからです。信者の婦人で身内にやもめがいれば、その世話をすべきであり、教会に負担をかけてはなりません。そうすれば教会は身寄りのないやもめの世話をすることができます。

13 主はこの(痛々しい)母親を見て、(深く) 憐れに思い(→悲惨さにおいて類のないほど、可哀そうに思い)、「もう泣かなくともよい」と言われた。

14 そして、近づいて棺に手を触れられると、担いでいる人たちは立ち止まった(→葬送の列を妨害したり、止めたりするのは、律法違反であった)。



イエスは、「若者（＝青年、ネアニスコス：40歳以下の者）よ、あなたに言う。起きなさい」と言われた。

15 すると、（その）死人は起き上がってものを言い始めた。イエスは息子をその母親にお返しになった。

16 人々は皆恐れを抱き、神を賛美して、「大預言者（→エリヤ、エリシャの二人）が我々の間に現れた」と言い、また、「神はその民を心にかけてくださった」と言った。

→ヤイロの一人娘の蘇生（マタイによる福音書9：18～26、マルコによる福音書5：21～43、ルカによる福音書8：40～56）、悪霊に取りつかれた一人息子をいやす（マタイによる福音書17：14～18、マルコによる福音書9：14～27、ルカによる福音書9：37～43）、ラザロの蘇生（ヨハネによる福音書11：1～16）

17 イエスについてのこの話は、ユダヤの全土と周りの地方一帯に広まった。

→ヨハネによる福音書3：16

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。